

グループ・ダイナミックスが向き合う価値： 認知科学との接点を探る

Exploring the intersection of group dynamics and cognitive science from the perspective of value

東村 知子
Tomoko Higashimura

京都教育大学
Kyoto University of Education
higa@kyokyo-u.ac.jp

概要

グループ・ダイナミックスに基づくフィールド研究において、研究者は価値とどのように向き合い、価値をどのように扱っているのか。この価値という視点から見たとき、グループ・ダイナミックスと認知科学はどのような接点を持ちうるのか。本発表では、筆者が取り組んできた、医療的ケア児のインクルーシブ保育と、幼稚園でのエピソード研修に関するフィールド研究をもとに、上記の問いについて考える。

キーワード：価値(value), グループ・ダイナミックス(group dynamics), 認知科学(cognitive science), フィールド研究(field research), 保育(early childhood education and care)

1. はじめに

筆者はこれまで、グループ・ダイナミックス(集団力学)の考え方にに基づき、フィールド研究を行ってきた。杉万(2013)によれば、グループ・ダイナミックスとは、「組織やコミュニティなどのグループ(集合体)の中に研究者が飛び込み、現場の当事者とともに現場を改善・改革していく実践的な学問」(p.i)である。「改善・改革」に関与する以上、そこには何を「よい(良い・善い)」とするかという価値の問題が関わってくる。研究は、当事者と研究者との協同的实践であり、必ずなんらかの価値や目的を前提にして行われるというのが、グループ・ダイナミックスの基本的なスタンスである。

フィールド研究において、研究者は価値とどのように向き合い、価値をどのように扱っているのか。この価値という視点から見たとき、グループ・ダイナミックスと認知科学はどのような接点を持つのか。そこから、研究の次なる方向性を構想することは可能か。本発表では、筆者が取り組んできた二つのフィールド研究をもとに考えてみたい。

2. 二つのフィールド研究

はじめに、筆者が行った二つの研究の概要を、簡単に

説明する。一つ目(以下、「研究1」)は、医療的ケア児の保育をテーマとする研究である(東村・鮫島 2021)。医療的ケア児とは、NICU(新生児特定集中治療室)等を退院後、人工呼吸器による呼吸管理や痰の吸引などの医療的ケアを受けながら、地域で生活する子どもたちのことを指す。こうした子どもの多くは、家庭で保護者(主に母親)がケアを担っており、保育園等に入園できない、学校や園から保護者の付き添いを求められる、そのために保護者の職場復帰が困難であるなど、多くの課題が指摘されている。筆者らは、医療的ケア児のインクルーシブ保育を早くから実現してきた保育園でフィールドワークを行い、その保育実践がいかんにして可能になっているかを明らかにした。

二つ目(研究2)は、京都市立幼稚園で行われている「エピソード研修」の研究である(東村・古賀・佐川, 2024)。エピソード研修では、保育者(クラス担任)一人一人が、保育の中での子どもの姿を取り上げてエピソードを書き、そのエピソードに基づいて園内の保育者で協議を行う。この研究では、書かれたエピソードに基づいてなされる対話、特に他者を価値づける発言が、保育者の学びや学び合いにとってもつ意味を明らかにした。

3. フィールドにおける価値の多層性

フィールド研究において研究者が向き合う価値には、いくつかの層があるように思われる。

一つ目は、研究者がその研究テーマやフィールドに取り組むにあたり、あらかじめ前提としている価値(観)である。研究1の保育園でのフィールドワークを開始した時点で、筆者らが前提としていた価値は、「インクルーシブ保育はすべての子どもに保障されるべき権利」であり、「医療的ケア児があたりまえに保育を受けられる社会が望ましい(そうした社会を作りたい)」という

ものであった。

二つ目は、研究者と個別のフィールドとの間での価値の共有（あるいは摩擦）である。研究者が関与するのは、ある特定のフィールドであり、無数にある現場の中で、なぜ他ではなく「その」フィールドに入るのか、問われることもあるだろう。筆者の場合、フィールドは自ら選択したというより、偶然の出会いや人の縁によることが多い。研究1は、医療的ケア児の保育に先進的に取り組んできた保育園の設立者と、共同研究者を通じて出会えたことがきっかけであった。

研究者があるフィールドに入りたいと思っても、現場の人々と価値を共有していなければ、そもそも入ることは難しい。その上、フィールドに受け入れてもらったからには、そこでの実践をプラスに価値づけたい（価値づけなければならない）という思いは多かれ少なかれ生じてくるのではないだろうか。上述の二つの研究では、筆者はこの点を自覚していた。特に研究2では、「エピソード研修ではとても大事なことが行われている」という共同研究者の直感と、その意義と価値を言葉にして広く伝えたいという思いが、研究のそもそもの出発点であった。

三つ目に、フィールド内部での価値の対立である。ただし、そうした対立は、研究者には「見えない」ことも多いのではない（少なくとも筆者には見えなかった）。その一つの理由は、フィールドに入る時点で、研究者はいずれかの価値にコミットしているとみなされるためである。これについては、パーカー（Parker 2004 ハッ塚訳 2008）が、「（エスノグラフィにおいて、研究者がコミュニティに受け入れられたと感ずることができたのは）コミュニティの特定の層が、あなたを味方につけようと計算ずくで対応してくれたのだ。自分がどう受けとめられているかを研究者は常に問い続けなくてはならない」（p. 68）と警告する通りである。

4. フィールド研究と認知科学の接点

3で見たように、特定の価値を前提とする研究のゴールを持ちながら、特定のフィールドの実践の価値づけをめざし、フィールド内部での価値のせめぎ合いのすべてを見渡すことのできない研究者のありようは、フィールドの記述や分析に影響を及ぼすのだろうか。

筆者の経験に限って言えば、研究者としてフィールドに入り、そこで起きていることを観察・記述しようとしている最中に、価値の問題を意識することは、実はほ

とんどなかった。実践とその意味をいかにフィールドの外の人々にもわかるように記述するかが、研究者として取り組むべき課題であり、重要な価値となっていた。その際、認知科学という学問分野は、そのフィールドを観察し、記述するための主要な視点の一つとして位置づけられる。どの視点で見るかによって見えてくるものは変わり、どれに依拠するかはフィールドによって決まる。この二つの研究では、筆者の限られた手持ちの道具の中で、状況論の視点が、フィールドで起こっていることを最もよく説明するように思われた。

研究1では、インクルーシブ保育の実践を可能にしている要因の一つとして、スタッフ、特に保育士と看護師を「分けない」ためのさまざまな道具や仕組み（エプロンの着用や互いの呼び方など）を見出した。論文では直接的に言及していないが、使用する道具や仕組みによってフィールドの人々の行為やコミュニケーションがどのように組織化されているかという視点は、状況論的なものである。研究2では、子どもの姿を観察・記述すること、書いたものを読むこと、それについて話し合うことの意味の考察に、想起や観察に関する認知科学や発達心理学の知見が援用できると考えた。

どちらの研究も、確かに価値の問題に向き合っているが、限界もある。まず、分析に援用した認知科学的な視点そのものにどのような価値が内在しているかという点には、ほとんど触れられていない。また、グループ・ダイナミクス研究として見ても、筆者は結局のところ実践に携わる当事者ではなく、第三者的・客観的に捉えていることは否めない。結果的に、3で述べたフィールド内部の価値の対立にも踏み込むことができていない。

価値を手がかりとして、認知科学とグループ・ダイナミクスがより深く結びつくような、新たな方向性は考えられるだろうか。一つの可能性は、「認知科学の視点を内包したグループ・ダイナミクス研究」というあり方を反転させ、「グループ・ダイナミクスの視点を内包した認知科学研究」に取り組むこと、そして両者を往還することである。グループ・ダイナミクスが問題とする価値を踏まえて、人々の実践、およびその中での行為・認知・知覚のあり方を探究する。その探究は、新たな価値や、それをめぐる新たな問いを生み出し、次の探究につながるだろう。

筆者は現在、医療的ケア児の通う保育・療育施設の防災について考える地域のグループに関わっている。「何かあったらどうするのか（対応できない）」は、医療的

ケア児の保育施設への受け入れを断る際の常套文句だが、災害はまさにその「何か」である。災害時に子どもたちのケアを継続するための実践や道具、そのベースとなる考え方を現場の人々と共に作り出し、「何かあったらどうするのか」という問いに正面から答えていくことは、医療的ケア児のインクルーシブ保育の促進に寄与するのではないか。

グループ・ダイナミックスと認知科学を結びつける重要な鍵は、言葉および言葉を用いた実践にあると筆者は考える。人間が言葉をいかに身につけ、使用するかは、認知科学の中心的なテーマの一つであり、一方、グループ・ダイナミックスのメタ理論である社会構成主義は、言葉によって現実や知が作り出されることを明らかにしてきた (Gergen, 1999 東村訳 2004)。研究者による現場への貢献は、まずもって言葉によるものである。インタビュー等で、他者の語りをいかに引き出すか。それをいかに解釈し、分析するか。そこからどのような理論を作り出すか。研究者自身が使用する言語と、そこに暗黙のうちに組み込まれている価値について問い直すことも重要である。

文献

- Gergen, K.J. (1999). *An Invitation to Social Construction*. Sage. (ガーゲン, K. J. 東村 知子(訳) (2004). あなたへの社会構成主義 ナカニシヤ出版)
- 東村 知子・古賀 松香・佐川 早季子 (2024). エピソードに基づく保育者の対話を通した学びと学び合い：京都市立幼稚園エピソード研修の事例から 認知科学, 31(3), 496-512.
- 東村 知子・鮫島 輝美 (2021). 医療的ケア児の保育を可能にする分けない実践：看護師が設立した保育園のフィールドワークから 質的心理学研究, (20), 278-297.
- Parker, I. (2004). *Qualitative Psychology: Introducing Radical Research*. Open University Press. (パーカー, I. ハッ塚 一郎(訳) (2008). ラディカル質的心理学：アクションリサーチ入門 ナカニシヤ出版)
- 杉万 俊夫 (2013). グループ・ダイナミックス入門 世界思想社